完本『大和絵の根元』と絵入狂言本『躑躅曽我狩場紅』

――新出二資料紹介――

松平　進

最近見る機会を得た新出の版本二種を紹介したい。一は西鶴作『好色一代男』の簡約絵本化本『大和絵の根元』の完本、二は絵入狂言本『躑躅曽我狩場紅』である。共に甲南女子大学における平成六年度近世文学会秋季大会（十一月五日・六日）でその存在を報告したが、今回そのうち二種について詳細を発表するものである。

一

まず完本「大和絵の根元」の書誌を記す。

［体裁］　大本。二冊。袋綴。

［表紙］　上冊、改表紙、砥粉色無地。下冊、原表紙か。

［寸法］　両冊共縦二七・〇糎×横一八・五糎。

［題簽］　上冊、表紙中央に後補墨書題簽「好色一代男絵つくし」。下冊、中央に原題簽「好色やまとゑの根元ヤアレ」。

［内題］　上冊、扉絵上部に「大和絵根元」。下冊、なし。

［丁数］　上冊、十四丁半。下冊、十四丁。

［柱刻］　上冊、手ずれ甚しく難読。上方「好色一之」、下方に「三」「四」…「七」などの漢数字が見える。下冊、上方に「好色二之」、下方に「一」―「二」―「三」……「十四」。

［奥書］　両冊共になし。

［備考］　上冊扉絵、机上の紙には「世の助／一代記」と記す。下冊、ルイ・ゴーンスの所蔵印がある。所謂取合せ本で、

所蔵者は上・下冊を別々に入手。

元来この菱川師宣絵本は四冊で揃いであるが、拙著『師宣祐信絵本書誌』（青裳堂、昭和六三年）でこれをとりあげた時は、孤本である東洋文庫所蔵の第一、第二巻と、これもまた孤本であるリチャード・レイン氏所蔵第三、第四巻をとり合わせて用いた。この第四巻には奥書があり、貞享三年正月鱗形屋版とわかる。絵師名も「大和画工菱川師宣」と明記されている。大英博物館東洋古美術部が所蔵するという第二巻（欠丁本）を私は見ていないので、他に寓目本は全く無かったのである。なお、東洋文庫本と新出本とは、同一板木から摺られたものであることは間違いない。共にそれほど早い摺りではなく、匡郭の欠けなど細部まで一致している。

今記した書誌からも明らかなように、新出本はこの四冊の絵本の前半部分、東洋文庫所蔵の第一、第二巻に相当する。話の内容でいうと、第一巻は世之助七歳から二十歳までの十四年間にあたり、各一年に見開き図一図を当て計十四図、第二巻は二十一歳から三十四歳までの同じく十四図である。周知の通り、師宣はこの絵本の二年前貞享元年（一六八四）刊の江戸版『好色一代男』に挿絵を寄せている。同書奥書には版元の川崎七郎兵衛の名に並んで「大和絵師菱河吉兵衛師宣」と記名が見られる。この先行する挿絵本の図柄を元に、絵本の図柄が構成されていることは一見明らかである。

東洋文庫所蔵本は、知られている通り欠丁がある。第一巻は冒頭一丁と六丁とを欠き、その欠けている六丁の位置に、五丁裏とは図柄の続かない半丁図が混入している。第二巻は冒頭半丁を欠いている。新出本は少し破損はあるものの、こういった東洋文庫本の欠と乱丁とを補正することができる完全な本である。かつて小池藤五郎氏は、この「世界の稀覯本」の欠丁を補完できずに「残念至極」と記しておられる（「新資料による西鶴の研究」）が、その残念が晴らされたわけである。補正は次の五点になるだろう。

(一)世之介七歳の冒頭図、右半分を補うことができる。図柄は江戸版挿絵にきわめて近い。

(二)世之介十一歳の第五図、左半分を補うことができる。江戸版挿絵より人物数を減じて、俯瞰図を水平図に改めている。

(三)世之介十二歳の第六図、右半分を補うことができる。手摺に寄り背中を流す一組の人物が挿絵より増えている。

(四)乱丁で六丁の位置に混入していた図が二十歳の第十四図の左半分に収まることが確認できる。

(五)第二巻の冒頭、世之介二十一歳の第十五図の右半分が補わ

れる。

以上はしかし、挿絵本を持っている我々には、結果だけを考えれば、それほど大きな発見ではないかもしれない。師宣絵本の完本の初出は、大きな喜びであること間違いないが、例えば六丁に混入した図も、挿絵本によって正すことも可能だからである。

新出本の最も興味深い点は、初丁表の扉絵部分であろう。「世之助一代記」をこれから執筆しようという男と彼をとり囲む遊女二人。男は西鶴なのだろうか、西鶴と重なった世之介の姿なのだろうか。この絵本を描こうとする師宣自身とみることも出来るのではなかろうか。絵の上部の文字「大和絵根元」は、はたして本書の内題と見ていいだろうか。「大和絵根元」とあれば、むしろ奥村文角政信が「浮絵根元」あるいは「江戸絵一流根元」と称したことに思い到る。「大和絵根元」は師宣の僭称か師宣に付せられた讃辞の肩書きではなかろうか。師宣はそう呼ぶにふさわしい絵師である。自身も絵本では「大和絵師菱川師宣」とほとんどの場合署記している。あるいはこの絵本作品を「大和絵根元」と称讃または宣伝したのかもしれない。これを『大和絵の根元』と読んで題名としていいものだろうか。

リチャード・レイン氏蔵第三、四巻は、題簽題・内題（目録題）共に備っている。

（題簽題）

「大和絵好色絵本大全　三」

「大和絵好色絵本大全　四終」

（目録題）

「好色世話絵づくし　三」

「好色世話絵つくし　四」

第一、二巻に関しては、内題（目録題）をだれも見ていないし記録していない。小池藤五郎氏は家蔵だった『大和絵のこんげん』第一、二巻の目録を、焼失前にとっておいた「粗略に記しておいた紙片」によって紹介しておられるが、肝心の目録題がどうであったかは、明らかではない。一方柱刻はどうかというと、一巻から四巻まで揃った形で「好色一之」「好色二之」「好色三ノ」「好色四ノ」とある。第三、四巻の「好色絵本大全」「好色世話絵づくし」という題と、第一、二巻の「大和絵の根元」という題とはかけ離れすぎていないだろうか。新出本の墨書題簽「好色一代男絵つくし」のような題がむしろふさわしい気がする。あるいは三、四巻と同一題だったかもしれない。

こう考えてくると、東洋本の上巻、新出本の下巻に存する題簽二葉を疑うことに必然なる。

「好色大和絵のこんげん　上」……東洋文庫本上巻

「好色やまとゑの根元　ヤブレ」……新出本下巻

新出本の題簽を最初に見た時、丁寧に墨書された後補題簽と思

った。丹念に見て行くと摺ったものとわかったが、字の線が細く新しいという印象は残った。しかしこれはあくまでも印象にすぎない。

この題簽が後補のものではないかということは、すでに天理図書館編『西鶴』（昭和四〇年刊）でいわれている。同書一一二頁より引用する。

よって（一、二巻の――松平注）書名・目録題が「好色絵本大全」「好色世話絵づくし」とあったことは、「好色」とある柱刻からしても考へられる。しからば東洋文庫蔵本に見える「好色大和絵のこんげん　上」の題簽は、後刷かその他の場合に後人が附したものと考へられる……。

後人が附した題簽が「大和絵の根元」という題名になったのは、この扉絵の文字を採ったのであろう。それは確かだと思う。そしてそれは、柳亭種彦の「好色本目録」（天保年間成）以前ということになる。同書を引く。

又○好色やまとゑの根元　上下

○日本ふうぞく絵本　上下

といふ書あり、是も菱川が画にて、「一代男」の絵を大本に書き、文章を約めて頭書になしたるものなり、開本のみ見たれば巻数は知らざれども、取集て四冊なるべし。按に、初めに『絵本一代男』として四冊刊行なしたるを、後に二冊づゝ引分て『やまと絵の根元』『風俗絵本』と名を附けたるもの歟。

種彦の見た本は、第三、四冊は「相ふうぞく絵本」という題になっていたわけである。それは題簽の題だったのであろう。第一、二冊の「好色やまとゑの根元」はその書き方からみて題簽をとったものと思える。すでにそういう題簽があり、そして扉絵はなかったのであろう。もとより題名についての結論は内題・目録題を備えた本の出現を待たなければならないが、この新出完本は多くの興味深い問題を投げかけてくれるものである。写真版で、(1)上巻表紙・墨書後補題簽、(2)扉絵（初丁表）、(3)第一図（初丁裏・二丁表）、(4)第五図（五丁裏・六丁表）、(5)第六図（六丁裏・七丁表）、(6)第十四図（一四丁裏・一五丁表）、(7)下巻表紙・原題簽、(8)第十五図（一丁裏・二丁表）を掲出して紹介としたい。

(2) 扉絵（初丁表）

(1) 上巻表紙、墨書後補題箋

(3) 第1図（初丁裏・2丁表）

(4) 第5図（5丁裏・6丁表）

(5) 第6図（6丁裏・7丁表）

(6) 第14図（14丁裏・15丁表）

(7) 下巻表紙　原題簽

(8) 第15図 (1丁裏・2丁表)

二

『躑躅曽我狩場紅』の書誌を記す。

[体裁] 半紙本。一冊。袋綴。

[表紙] 原表紙、砥粉色無地。

[寸法] 縦二一・八糎×横一五・九糎。

[題簽] 左肩に白地題簽、縦一六・三糎×横四・八糎。「吉弥大でけ 八重桐大あたり さくらそが後日さつきそが躑躅曽我かりのわん久相手なしの一人ごばん大あたりふ屋町通八文字屋八左衛門」。中央に赤地の脇方簽、縦七・八糎×横六・二糎。「名代ほていや 立役音羽次郎三郎 立役百人首源三郎 大夫ふぢおか大吉 座本 萩野八重桐 大夫上むら吉弥 立役山もと面金ざは彦五郎 立役染川六郎左衛門」。

[内題] (目録題)「桜曽我花の後日さつき曽我中村七三郎置みやげ中村伝九郎かたみの面影けいせい浅間曽我加へ仕候」、(本文題)「上桜曽我花の後日躑躅曽我狩場紅座本萩野八重桐大当り」。

[行・丁数] 十二行七丁(六丁と半丁二葉)。

[柱刻] 下方に丁付け。さつき三 — さつき四 — さつき五 — さつき六ノ十 — さつき十一 — さつき十二

〔奥書〕 本文末尾に「八もんじや八左衛門板」。
〔挿絵〕 見開き二図。「三」丁裏「四」丁表、「十一」丁裏「十二」丁表。
〔備考〕 挿絵に色ぬりがある。

名代布袋屋・座本萩野八重桐という組合せは、京都で享保七年から九年まで三年続くが、脇方簽に見える七名の役者が揃うのは享保七年に限られる。この狂言は『桜曽我』の後日と題簽や内題に記されている。『歌舞伎年表』によると『桜曽我』は八重桐座で享保七年一月の上演で、五月頃には大阪の嵐三右衛門座と竹島座でも上演されている。後日狂言の『鄙鶯曽我』は、従って一月以後ということになる。題名から、初夏の上演と考えてよかろうか。

役人替名の目録題に「中村七三郎置みやげ／中村伝九郎かたみの面影／けいせい浅間曽我加へ仕候」とある通り、『けいせい浅間嶽』と関係が深い。起誓を焼くととらの姿が現われる反魂香の趣向、五郎が碁盤縞の羽織と茶椀の破片で碁の手になぞらえてあてことをいう独り碁の趣向（その部分が題簽上部の絵になっている）、鬼王が五郎をぞうりで打つ草履打の趣向など、『浅間嶽』をとり入れたものが多い。初代七三郎は、『浅間嶽』の作者でもあり主演者でもあり、初代中村伝九郎は旭比奈役の基礎を作った役者である。この狂言本で朝比奈の活躍場面は多い。なお役者評判記でこの上演に言及した部分を私は発見していない。以下、本文を翻刻紹介する。

翻刻凡例

一、字体は通行のものに従った。
二、丁・行移りは翻刻に表していない。丁移りのみ実丁数で示した。
三、句点はすべて●になっているが○で示した。
四、虫損部分は□で示した。
五、挿絵中の文字は、本文末の図版下方相当位置に翻刻した。

翻刻

立役　音羽次郎三良
立役　百人首源三郎
太夫　ふじおか大吉
座本　萩野八重桐
太夫　上むら吉弥
立役　山本金ざハ　彦五郎
立役　染川六郎左衛門

名代ほていや

第1図　（表紙）

第2図　（1丁表）　　（表紙裏）

吉弥大でけ　八重桐大あたり

さくらそが後日さつきそが

鄙躅曽我

かりのわん久相手なしの一人ごばん大あたり

ふ屋町通　八文字屋　八左衛門

（表紙）

桜曽我花の後日　さつき曽我　中村七三郎　中村伝九郎かたみの面影　けいせい浅間曽我加へ仕候

上　なごりのかわづ井出のやかた

中　なごりのうきよせみの羽衣

下　なごりの盃さみだれのしづく

一　右大将よりとも　立役　山本彦五郎

一　御所の五郎丸　敵役　山中猶十郎

一　かづさの介　早川多門

一　ちばのすけ　豊田小源太

一　ほんだの次郎　はぎのさよの介

一　工藤左衛門介経　立役　染川六郎左衛門

一　女房夕がほ　若女　富永玉桐

一　子いぬばう丸　若衆　萩野伊三郎

一　介経妹みほ姫　若女　花川いせの

一　あさいなの三郎

一　ぞうり取じやう介　いづゝやきん七

一　こしもと小じま　かぶろたけの

一　こしもといくしま　かぶろともや

一　こしもとしげ山

一　かちはら平次

一　びぜんの大藤内

一　京の小二郎

一　平馬の丞

一　侍　音八　梅井権十郎

一　水茶やごけ

一　同　八すけ

一　あげや新介

一　いづゝやぎん右衛門

一　けはひ坂少将

一　かぶろ　ふじの　松本ちよ菊

一　きせ川かめぎく

一　けいせい大ぎし

立役　金沢彦五郎

二役　はぎの八ちよ

（表紙裏上段）

二役　竹中いろは

二役　山本さとの介

山本松三郎

中村新三郎

ばんどう兵六

敵役　岡島元右衛門

大原杉右衛門

一　侍　藤蔵　葛木藤四郎

玉川千之丞

浅尾新兵衛

古今新左衛門

市川丹右衛門

太夫　上村吉弥

一　やりて　玉木文左衛門

（表紙裏中段）

花垣松之介

岡島ちさと

一　けいせい大江　竹中なるせ
一　大いそとら　太夫　藤岡大吉
一　しんがいあら次郎　二役　山中猶十郎
一　おにわう　二役　山本彦五郎
一　そがのは、　二役　ふちおか大吉
一　ぜんじぼう　榊山四良十郎
一　おに玉女ばうまこも　若女　はぎの梅之介
一　どう三郎　早川小かつ
一　につたの四郎　立役　音羽次郎三良
一　そがの十郎　立役　百人首源三郎
一　そがの五郎　座本　萩野八重桐
一　十徳姿かりのわん久　大々あたり
相手なし／ひとりごばん

（表紙裏下段）

上　桜曽我花の役日　躍躍曽我狩場紅　座本　萩野八重桐大当り

右大将頼朝公。あさまの御かりも今明日にて事すみ。ふじのへ御こしとふれければ。かりや〳〵のにぎわしさ。ちばの介かづさの介当世若衆。羽折大小ふり姿。介つねのいもと。みほ姫のこしもとぬれかゝれば。二人はかしこへ入給ふ。小林のあさいなは。若衆でつちじやう介供につれ。大酒のんでまつかい顔。みほ姫立出。きつとしてすいた男とほめられて。あさいなのせられ。女はべたついていやな物じやが。そちは詞がすんとしてよいと云ば。こなんにいひたい事有と。もたれよればいやらしいと。つきこかされあゝいた〳〵。こしもと衆は。是は介つね様の御いもと。みほ姫様わびなされ。此あさいなが女ニわびした事ない。めいはくなかんにんせろ。そんなら頼む事有。十郎様ニ恋じや取持合して下さんせ。合さふも切手の札がなければ。通す事がならぬ。姫聞兄介経様をだまし。札ぬすみ持てゐます。十郎様とさかづきしたら。すぐにしんぜます。のみこんだとあさいなよびニ行。みほ姫かしこへ入。十郎は弟ぜんじ坊を。かぶろ姿にしつれ参る。あさいなはそちを尋まはる。介つねが妹そちに恋をし。盃いたしたら。かりばの切手札やらふと云。ふじのへ行ても。其札なければかりやへはいられぬ。盃して札取やうニしやれ（1丁表）

挿絵（1丁裏）

挿絵（2丁表）

十郎聞。大いそへ参つたればとらが申は。みほ姫より一夜かしてくれと文が来た程ニ。私に行と申此かぶろにへんじおこしましたと云所へ。かめぎく来り。とらさんが。悪性な十郎さんな

第3図　挿絵（2丁表）　　挿絵（1丁裏）

介つね妹みほひめ
けいせいかめぎく
かぶろ友弥
大吉
大でけ
大いそのとらあらはれ
そがの十郎きもつぶす
百人首
大でけ
金沢大当り
あさいなきめる所
岡島
大でけ
京の小二郎水あぶせ
侍共手おけ持
中げん銭出す
二役
大吉
大でけ
そがの母せつじする
伊三郎
大あたり
八重桐
大当り
どう三郎薬取二行
いぬばう薬やる
おに王女房まこも
そがの五郎ぢいのすがた

五郎馬のおづ、引とめる
八重桐
大当り
そがの母やうすいふ
介つねゑぼしおちる
染川
大当り
百人首
大でけ
いぬばうわびを云
十郎かけ付討んと云
びぜんの大藤内
（1丁裏）

せんじ坊若衆姿
皆々
大でけ
そがの母め見へぬ
十郎見てゐ給ふ
少将とら二成ゐる
五郎わん久すがた
けいせい大江見る
かぶろたけの
八重桐
大々あたり
（2丁表）

れば。一夜かしたら跡がいやじやと。へんがへのへんじ私頼れ持来た。さあもどらんせ。其文見しや。是と渡せば。本ニへんがへ状じや。取かへもどし。こちへはあへと云てあれば。姫ニあふと云。みほ姫出給ひ。十郎様かうれしやとあれば。かめぎくは。とらさんの文成と渡す。よみて見れば。十郎さんを一夜かすとの文てい。かめぎくはつと。扨は取かへさんした。なんぼでも私が付てゐて合さぬと云ば。あさいな。まてゐなしやう有と。女のぞうりへやい火すへれば。十郎ゐにたふ成たと次へ立。其女ぞうりはとらがを。かつておれがはいてきた。どれがかめぎくがであらふ。皆すへと火のせれば。残らす帰る。跡にはみほ姫十郎ニむかい。ねまへ入んと有ば。とらときしやう取かはしゐれば。ねる事なら尋てからと云ば。其きしやう見せさんせと取て見。引さき火ばちへなげ入。火にもへし中より。とらが姿すつくと立。うらみも恋ものこりねの。思ふたがいはらさん為のせいしをば。なぜにけふりとなし給ふと。こゝにきへかしこに立。おぼろ月夜にはかなくも。きへてかたちはなかりける。十郎みほ姫気が付給ふ。所へ京の二郎。長ゑのかさひろげ。女房よんだ。川ぼつこめ〳〵と。侍共ニ手おけに水持せ。祝ひの若水〳〵とつめかくる。所へあさいなかけ来り。いでいは、んと。侍共がくびすじ持て。おけの中へ取てはなげ〳〵。小二郎きもけしにげさりける。所へ本田の次郎しかをゐとめる。かぢ原平次かけ来り。此し、は身がゐとめた（2丁裏）介つねかけ付。二本矢なれ共。本田と印の矢し、のきう所ニ立ば。かぢ原だまりめされ。平次はら立。身をいつわり者にするか。京の小二郎来り。是介経殿。そなた切手札ぬすまれたであらふが。そちはかまくらで見なれぬ何物じや。お、京の小二郎と云。かぢ原殿を頼んで奉公を望む者じや。あさいなはせ来り。是介経切手札は身がぬすんだ。ぎんみに及ぬと云。ちばかつさはせ来り。介経殿君の御召はや御出と云。かぢ原はし、ろんすまねばやらぬぞ。あさいな聞。御上意と有介経参られ。跡は此あさいなが請取たと云ば。介つねちばかづさと打つれ行。かぢ原は我ま、千万。のがさぬと取まはす。あさいなから〳〵と笑ひ。いで物みせんと。侍共をなげちらせば。かぢ原小二郎跡もみずにげて行。あさいなはしんづ〳〵と帰りしを。ほめぬ物こそなかりけれ。かくてみほ姫こしもとつれ。大藤内御供申はこね参り。出茶やへ立より。くふ物出せと云ば。茶やごけ。まめのこのもちを出せば。大藤内皆くひ。銭持合さぬしあん有と。そば成せうぎニいとひんの侍。けらい諸共ねてゐる。口もとへまめのこをぬり置。侍めさまし。けらい共が口もとをわらへは。けらい共はだんなをわらふ。もち参つた銭やらしやれ。何云覚ないと

云所へ。京の小二郎ほうかふりし。さあ〳〵そがの十郎が介経妹と。みつつうしたさうしがたつた一文〳〵。いとびんの平馬の丞是はめづらしいかはふ〳〵。ちばかづさ来り。是そちはそがとははら替りの兄弟。一家の身で。悪性よみうりは何事ぞ。ィヤやせらうにんを一家とは思はぬ。平次殿がみほ姫にほれてござる。某頼れうばふて行。平馬も一所じやと云ば。ちばかづさ聞。みほ姫に大藤内を（3丁表）そへのかし。両人ぬき合給へば。平馬小二郎にげ行を。跡したふておつかけ行給ふそがの老母を土車ニのせ。おに王が女房まこも。どう三郎つな引。はこねごんげんへ日参。時づけのひきやく間なく通れば。老母は水茶やゞごけに尋給へば。さればあさまのみかりがすんで。ふじのまきがり有。其御飛脚でござりますと云ば。扨は兄弟が日比の願ひ。命もちゞまると思ふ心で。むねつかへ給へば。まこもは。山でおこればあしい。薬取てござんせ。心へましたとどう三郎やどへはせ帰る。是なふたんすニ薬入て有。其かぎ是じや〳〵と跡よりおふて行。水茶やは。わしが内ニよい薬有。上ませふと取に行し。跡にてしきりにむねいたみ。のつけにそりせつじし給ふ。介つねが一子いぬばう丸馬ニのり。供引ぐしはこねへしやさん。先手の侍。是ニ老女しがい有。けがれいかゞわき道御通りと云ば。それ忌とはおのれが心と霄。神の本心はじひ。何けがれあらんやと馬よりとびおり。老母のみやく取。惣身あたゝかなと。いんろうより気つけ出し。口へ入水そゝげばいき出る。是老女〳〵とよびいけ給へば心付。あゝどなたぞ。めみへぬ物じやニ忝ない。おゝせつじし給ひしゆへ。薬あたへよびいけた命めでたい。つまはづれよし有人と。けらいに持せし鳥目壱貫文。心ざしじや請て下され。老母こゑをきけばようせうの御方。しほらしい忝ない。私こそめみへね。兄十郎ニ御やしきへつかはし。礼申させませふ。どなたぞ御名仰られ下され。ィヤ礼うけふとて心ざしはいたさぬ。ゑん有ば重てと。けらい引ぐし過さり給ふ。所へ水茶や立帰れば。かやう〳〵とかたり給ふ。所へ五郎時宗は。しらがかづきぢいの姿。ゆかたうはばりつゑつき。はこねへ代参〳〵と。立より老母をみてきもつぶす。母は是々（3丁裏）代参頼まふ。まい日四つ迄ニ参る願。せつじしてひま取た。四つ過ぬ内ニ参つて下され。此一〆の銭は大名の若殿が心ざし請た。ごんげん様へ上て下され。心へました。めのわるいゆへ願かけ給ふかいや五郎と云あんばく者出家せずそれでかん当せしが。まきがり近付ば年来の本望とげん。其願で日参。あれめが事あんじ。気上りてめもみへぬとの給へば。五郎しのび涙ながら。わかれて代参申ける。まこもどう三郎はせ帰り薬出せば。老母有しやうすかたり給ふ。どう三郎む

かふを見。やり印が慥介つね殿。老母聞。あふてはむつかし車引こめ。畏つてかたはらへしのび入。所へ介経立ゑぼし大もんの袖まき。馬上ゆゝしく大ぜい引ぐし来る。こかげよりしゆりけん打。介経が立ゑぼし打落しうしろの松ニ立。あやしいやつあらんさがせ。侍共畏つてぢいを引立来る。介経みて。むゝ唐士にも。おもてにうるしをさし。こつがい人のていと成敵ねらひし。そち正しく五郎じや。おゝよく見たと。しらがゆかた取てすつれば。むねぐそく小手大太刀つつ立ば。介経みてやい五郎。五月廿八日とけいやくわすれ。だまし打ふやひけう者め。五郎聞。けいやくわすれぬゆへ命取ぬ。顔みて此目がかんにんせぬゆへ。ゑぼし打落し目ニたんぬさすると云所へ。十郎馬上にてかけ付。母上気色と聞はせ来た。五郎聞それはよい。介経に出合たさあせうぶ〳〵。今は君の御用。のかぬと馬のひづめニかくるとかけ出すを。五郎馬のおづゝを取引もどす。介経十郎馬よりおりる。所へいぬばうかけ付。御兄弟様おやの命をたすけて下され。介経いかつて。それはひけうな何事を云。親の命たすけてもらふがひけうならば。そが兄弟はひけう者。老母まこもどう三郎ニ手引れ出。成程さいぜんみづからせつじしたるを。いぬばう殿ニたすけて（4丁表）もらふた。十郎礼いやれおんをしらねば人でない。今介つね殿ニ手むかいしては。道しらずに成が。十郎ぜひなく。いぬばうへ礼いへは。介経は十郎殿へ礼ヲ申せ。いぬばうは親ノ命たすけ下され忝ないと云。五郎ははがみなせ共。ぜひなくわかれかへりける

中

大いその色さどへ。（ママ）おに王あげやへ来りおくへ入。所へけはひ坂の少将かごにのり。かぶろ友弥つれ来り。かごをかへし。あげや新介ニあひ。とらさんはと尋れば。けはい坂へござりました。此度ふじのまきがり。日本の大名衆お出ゆへ。かりばへ色町出し度とノ願かなひしゆへ。新ぞう立をやるはづじや。少将聞。それに付とらさんとわしと。其みかりばが見たい。おやかたへそせう□（出様）。わしが事はとらさんに云てもらふ。とらさんの事はわしが云ニきました。いづゝやぎん右衛門出。少将様よい所へお出。小二郎様がおまへに合たいとのおねがいどうぞ頼上ます先わしがそせうかなふたら。其上で事と打つれおくへ入。五郎ごばん鳴の羽折に大小。あみがさ姿で大いそへ来る。新ぞう／三うらおくより出るを。小手まねき。そなたの此さとへ身を売給ふを。跡で聞きもをつぶした。礼いはふ為きました。はなしたい事も有といへば。おくに小さしきがござんすと。つれ立内へ入。十郎はゑぼしすはうちやくし。老母をかごにのせ。ぜんじ坊若衆姿大いそへ来り。少将ニあひとらを尋れば。右の

第4図　挿絵（6丁表）　　挿絵（5丁裏）

五郎ちやはんのわれごうつ
八重桐
大々あたり
少将はら立ねてゐる
梅之介
大でけ
おに王女房新ざうみうらと成
吉弥大でけ
五郎ゆび切てやる
八重桐
大当り
京の小二郎見てゐる

しんがいやうすを聞
五郎ぞうりでぶたるゝ八重桐
大あたり
おに王ぞうりでたゝく
山本彦五郎
大でけ
音羽
大あたり
少将みうら三云ぶん
につたの四郎聞ている
みうらやうすをいふ

とらあめうりと成
皆々
大でけ
かぢ原平次とがめる
平馬の丞ぎんみ
そがの十郎敵討
介つねくびうたれ
五郎扇紙子出す
少将あめうり姿
（5丁裏）

十郎うたれんと云
いぬばう討かぬる
よりともなはかけ給ふ
五郎丸しばらるゝ
皆々
大あたり
五郎時宗□
小二郎かみぬかるゝ
あさいな引ぬきぼうず二す
介つね女房なわ取
につたいぬばう二うてと云
（6丁表）

やうす云ば。母がとらニあいたいといはる、ゆへつれてきた。目がみへねば。こなたとらニ成あふて下されといひふくめ。母をかごより出しざしきへともなへば。とらどのか。十郎が母でござると。さかづきさし給へば。少将とらに成あいさつし。母のさかづきを。五郎しやうじの内ニゐる所へ持行。いたゞかす。少将母ニむかい。五郎さんのかんどうはなぜでござんす。はて出家せぬゆへじや（4丁裏）そんならぜんじ坊様なせかみおかんした。あれは出家したを。十郎の力ニ母が男になした。五郎ははこねごんけんへ出家せずばかん当いたすと。神へちかい立たれば。ゆるしては神のばちがあたる。一日でも出家せば。神へ申はけ立ばかん当ゆるすと有ば。十郎少将を次の間へよびて。母の御めみへねば。五郎ニ十徳きせ出家に成しと云て。かん当のそせうしたらかなはふ。少将悦びさいわいこ、へきてじや。のみこんだと内へ入。女郎かぶろに云合すれば。皆口そろへ。あれきちがいのわん久坊がきたは〳〵と云所へ。五郎は丸づきんニ十徳。つゑこしにさしうきよ六法。たどり行今は心もみだれそろ。母のかん当身ニうけて。あふ事が神の力でかなはぬか。それ〳〵〳〵合て見や。そしつても合せぬは皆いつわりの御神やと。くるひ来れば。少将は五郎さんの出家姿て。きちがいにならんしても。かん当の事計くにしておつしやる。御ゆるしなされませと云ば。かはひやこ、へよび給へと有ば。五郎おそばへ参れば。あたまや十徳なで。出家ニ成た。かん当はゆるす。気をなをせ。五郎悦び御ゆるしの詞を聞たれば。本性に成ました。お、うれしやとさかづきし給へば。十郎は此度頼朝公ふじのまきがり有。兄弟見物ニ参度候。御いとま下されませ。お、見に行給へ。五郎申は。諸大名の出合のばなれば。御かり見物の間は男姿で参りたい。立帰ると出家いたす。此義御免下されと云ば。尤じやかはづと云し大名の子共じや。かりば見物の間男姿で行給へ。もはやそがへ帰らふと有ば。十郎ぜんじ坊母の御供申かへれば。五郎は悦び少将と打つれをくへ入。みうらと云新ぞうは。おに王が女房まこも。そが兄弟の為身を売つとめ姿。五郎あひニ来りしみ〳〵かたる。所へをくよりよび立れば。後に〳〵とみうらをくへ入。少将是を見。五郎が新ざうに恋であふと思ひ。よきかづきねる。（5丁表）

挿絵（5丁裏）

挿絵（6丁表）

かぶろ友弥ちやはんへ薬入持行を。五郎取。気色どのやうな。是薬とさし出す。少将顔上ちやはん取てなげ付。よぎかづきふす五郎は是は〳〵と。ちやはんのわれをひろい。ごばん鳴の羽折ひろげ。此目をづ（つゝ）ふし。一かんにしてころさふや。中手先入

めを持じや。大じんが付たゆへ。我らとゑんきらふや。そこをかまはず渡りてゐる。ごニよそへあてこと云ば。はら立も、へかみ付ば。我らがも、をきじと思召かくぜつなら無用。大和山甚左衛門と云大名が有てくぜつした。少将はら立。新ざうのみうらにあやる。成程あいにきた。是云たら扨はと手打。なかねばならぬ。鬼王が女房まこもじや。兄弟ふじのみかりに行ニ。身ひんなればこしらへ□ぬ。女房がつとめ奉公ニ出。其金我々へくれた。せめて心ざしの礼いはふ為きたと云ば。さふとはしらなんだこらへてと云。所へみうら出れば。少将はおくへ行。みうらは。なふきのどくな。しんがいがわしをうけ出すと云。どうぞ行ぬやうニ。五郎さんしあんし下さんせ。急ニしあんが出ぬとあんじ。顔つや〳〵見。何かくさふほれてゐれ共。鬼王女房ぬし有ばかなはぬ。今ながれの身じや。さあかなへてと取付ば。しんじつならせうこ見せ給へ。五郎小ゆびを切紙ニつゝみやれば。みうらくはいちうし。刀ぬき取。ちく生やらぬと切付れば。五郎にぐれはつゞいて追かけ入。につた〳〵四郎来れば。しんがい出合。こなたの妹ごへたのみの印つかはしたニ。急病でし、たと有ばぜひないと。思ひ明らめしニ。新ぞうのみうらがそふじや。五百両でうける。につた聞。身がうくると。たがいにやしきへ金取にやり。はやう渡した方へ取と云。所へにつたが中げん金持参すれば。親方へ金渡し。扨みうらをしぶ紙の上へのせ。おのれはみつつう男と立のいたと聞しが。くるはへきた不義物め。くび討しんがい殿御目ニかくると刀ぬく。所へ（6丁裏）おに王かけ出。みつつう男は私。女房がつとめは主への忠とやうす一々申所へ五郎出れはみうらは夫婦が心をむにし。わしにほれたとゆび切給ふと。取出しみせれは。につた五郎が手みれば小ゆびなし鬼王あきれ人でなしと。ぞうりでさん〳〵打五郎は一通り聞てくれ。まつたくそちか女房ニほれはせぬ。身請する大じんが有。行ぬやうニしあんしくれと云。やつては身も立ぬ。まぶの男有といはゞ。水くさく身請やめんと思ふて云かけた。それにゆび切たはどうぞ。さればぜひニ切ゆび。是みられと一つうを出す。何々書置の事。我ようせうよりはこねへ上り。出家に成ル身。父のあだはうぜん為ニげんぞく。本望とげなば出家とぐるせいごんの為。小ゆびを切三宝へさゝぐると有。扨は仏へ切しゆび。鬼王夫婦はもつたいなや。ふみにじつて下されませ。忠義の道くるしうないぞ。しんがいはら立討てかゝるを。五郎切ふせ打つれそがへ帰りける

下

かくてそが兄弟まりこ川にて。おに王とう三郎をかへしふじのへ行。とら少将はあめうり姿。荷の下より将束出し。兄弟ニに

せしのび入。十郎五郎かりやへしのび入。介経ふしてゐしがおき上り。けいやくで討る、程ニ。十郎いぬぼうに討れ□を立てくれ。心へた。五郎聞。某は女房ニとらへられん。さあ介経せうぶ。心へたと刀ぬくを。一の太刀十郎。二の太刀五郎。年来の本望とくび切。十郎父母へみせたしとあれば五郎こしより扇出し。のべニかはづのなくこゑのせうが。父上と思召。此紙子は母の身成と下された。是父母とくびたむけ。頼朝はおふち伊藤の敵と切入。につた犬坊つれ出れば。十郎刀おれば。につたくび討。犬坊が十郎を討しとなのり入。五郎みだれ入。五郎丸を介経が女房と心へなはか、る夕がほ来れば。はつとなは切五郎丸をしばる。頼朝座を立。五郎ニなはかけ。たか、岡でせつふくさせ。兄弟の宮といはひ給ふ

八もんじや八左衛門板（7十表）

〔後記〕　貴重な御所蔵品の紹介を御許可下さいました田中利明氏及び関谷徳衛氏に心から感謝申しあげます。